

---

# 日本村落研究学会 研究通信

(No. 200 2001. 1. 26)

---

(事務局) 米沢和彦 (熊本県立大学) 徳野貞雄・古賀倫嗣 (熊本大学)  
〒862-8502 熊本市月出 3-1-100 熊本県立大学総合管理学部社会学研究室  
Tel(096)383-2929(内 682) Fax(096)383-2966 E-mail : yonezawa@pu-kumamoto.ac.jp  
郵便振替口座 01730-9-90893 日本村落研究学会

---

- |                 |                     |                |
|-----------------|---------------------|----------------|
| (1)創刊 200 号に寄せて | (6)2000 年大会報告       | (11)学会費納入のお願い  |
| (2)総会報告         | (7)大会印象記            | (12)会員名簿作成のお願い |
| (3)理事会報告        | (8)2001 年大会テーマセッション | (13)会員動向       |
| (4)2001 年大会について | (9)地区研究会報告          | (14)資料 決算及び予算書 |
| (5)50 回記念大会について | (10)京都環境社会学国際会議の開催  |                |
- 

## 1. 【創刊 200 号に寄せて】

中村吉治氏の「諸学交流の風」

内藤 莞爾

先日、事務局の熊本県立大学から、次のような注文がきた。来年(2001)の『研究通信』は創刊 200 号を迎える。ついては先生の随想をひとつ…というわけだ。来年はちょうど 21 世紀の第 1 年に当たる。こんなとき随想を頼まれたのは、まことに光栄だが、私はどうも適任者ではない。なるほど「村研」設立のとき、私は発起人のひとりになった。しかしその後の出席率がよくない。30%か 40%ぐらいのものか。それに事務局の私への注文は、どうやら 201 号以後の編集方針にあるようだ。ところが私はすでに老骨。遺言を書いても仕方がない。というわけで逆に古いところを一席。特に創刊号と私に印象的だった鳴子大会のこと。

1. 村研は日本社会学会大会の副産物のような経過で、1952 年の末に発足。しかし大会の開催は翌年の秋になる。その間、53 年 1 月の設立準備会で会則案のようなものが出来、続いて第 2 回の会合で、大会の場所として東北大学に打診。内諾を得て、翌 2 月の会合で具体的な計画が検討された。『研究通信』の発刊もこのとき決まったが、実際に陽の目を見たのは 4 月のことである。日本の年号で言えば昭和 28 年、今を去る 48 年の昔である。

見本を次ページを載せておいたが、ご覧のようにガリ版刷り。名画(?)のカット 12 葉を含んで 8 ページ建て。見本の下段に有賀喜左衛門氏書いているが、村落研究という

学際的な共有財産には、年1回の大会と年報では足りない。「平素の通信連絡を万難を排して」することが大切。その媒体がこの『研究通信』だとしている。なおこの創刊号には、さきに決まった会則が載っている。これには会の名称、目的、事業などは出てくる。が、組織のことはまるで判らない。ムラに関心のある人で、入会金100円、郵便代100円出せば誰でも会員になれる。そこまでで理事も委員も出てこない。それよりも会長が不在である。なるほど創刊号の巻頭には有賀氏が「発足にあたり」を寄せている。村研におけるこの人の存在は大きい。しかし同氏は会長ではない。われわれは同氏を「名主」と呼んでいた。このように村研は集団性・成員性ともに乏しい。われわれは「同志的結合」と言っていたが、これはいささか僭称のようである。

こうして10月20日、東北大の農学研究所で第1回の大会が開かれた。共通テーマは時節柄、「農地改革」だったが、私としては東北大発表の煙山調査が記憶に残っている。これが農村調査というものかと感嘆。なお本調査は後に大冊となって公刊された。

さてこの煙山調査の先達は中村吉治氏だが、同氏は後にこう書いている。大会では村落共同体について、社会学・経済学・歴史学がワイワイしゃべったが、ちつとも纏まらない。纏まったのは夜の懇親会だ。終列車が出るまで討論したし、在仙の連中は、残りの酒で朝まで討論した。その代わり閉会の辞はとうとう無かった。そこで中村氏曰く。「諸学交流の風を起こすには、こうした懇親会を慣例としては…」。

2. 次に印象に残った鳴子大会のことに触れておこう。第6回大会で1958年の秋。このとき初めて泊まりこみが実行に移された。ただ異論もあったので、事前にアンケートを実施、7割程度がこれに賛成した。共通テーマは「村落共同体」。対象地点が東北に片寄らないように、関西・山陰・九州にまで拡大。ムラには漁村も含まれた。それから泊まりということになると、中村氏の言う「諸学交流の風」は、微風どころではない。鳴子はコケシの産地だが、なにぶん仙台からJRで2時間半。小牛田で支線に乗り換えなくてはならない。それを見越して『研究通信』(28号)は、「温泉でくつろぎながら討論を…」という旅行社なみのCMを書いた。おかげで55人が集まった。ただ女性の会員はゼロ。報告は初日が6本、翌日の午前が4本、午後は討論になった。が、例の「諸学交流の風」は、開催前夜から吹きはじめた。そして懇親会では、風速が倍加した。「秋の夜長をドテラ姿で酌みかわす酒は、予想以上に旨く、ついにお国自慢の一声もでた」(30号)。それだけではない。有志の歓談はなかなか果てず、12時に解散。仄聞ではなお1時間の延長となった。因みに本大会の会員の負担は、参加費300円(懇親会費を含む)、宿泊費1,200円(3泊、食事とも)。無論、そこには地元の会員の農協・地銀などへの働きかけがあった。

ついでなので『研究通信』について付記すると、創刊号(1953)から50号(1965)までは、1972年に限定復刻版を印刷、第100号(1976)は『第百号記念特集号』と題して、有賀氏以下7氏の回顧談を載せている。

(九州大学名誉教授)

第1号

1953年4月18日

# 研究通信

村落社会研究会発行

101

東京都文京区大塚窪町三丁目  
東京教育大学社会学部研究室  
通信編輯部  
東京都文京区本郷三丁目  
東京大学文学部社会学部研究室



## 村落社会研究会の

### 発足にあたり

有賀 正三 工 門

昨秋十一月以来三回の準備打合せ会を重ねて、我々の村落社会研究会が成立し、今その研究活動を初めようとするに至ったことは是非際下しれしく心ります。すでに設立趣意書でも申し上げましたように、本会の目的は同業の人々の、或は相互別々、或は互々互々の、思ひくの研究をとりこむる現状を、もうと組織的に結び合せて、今後の血縁に走り関心を呼びさまし、研究上の熱意を呼びさまし、正確にして精進する研究方法及び共に検討して全体

として研究の発展を向の目としよう案にあるのであります。  
この目的によって、故にしばかりの百石近くには、このことは、その希望が、何か強いものであるかを語って余りがあると思ひます。  
この会を通じて達成する道は大きくわけて二つあると思ひます。一つは同志の結合を強めるための基本的な考え方と方法とを構つことであり、他方一つは我々の研究成果を現在の危機に於いて、日本人の生き方の上に大きく生かしたいという熱望であります。  
カ一のことは設立の趣旨にしたがつて考えられる事であつて、研究の成果を高めるためには問題意識の分析や研究方法の精細な検討が重要なるには、或はありまぜんが、それを成就するには、相互に誠意ある批判が行われなければならぬと、いふ事が根本とせざると思ひます。全目的な

ひつかりです。生活や工ややスガの異なる人々が相持する事になり、誤解を生ずるかを知れませんが、お互に寛容な心持で持つて、他の批判を受け入れて行けば、何人々々の立場の相違はあつても、研究上の共有財産を多くすることが出来ると思つてあります。本会にせういう風になりたりと思ひます。そしてこの結びつきを深めるためには一年一回の討論会や年報の出版のみでは足りないので、各地における研究会との連携の外に、会員の平素の通信連絡を万難を排して、もやうて行きたりと思ひます。二の案に、いかく留意して頂きたいと思つております。  
カ二のことは現在の世界の危機に於いて、日本人が日本人として住まざるにはどうすべきかという、我々の科学的・精神的活動から解脱することは出来ないのであります。その成果が百戦であるなら、当然実践にえりきよう力をもち出すべきであります。か、問題のえらび方と追求の仕方とは重要であります。したが、我々の研究会には種々あるとして、又村落社会を対象とするとして、現在の危機に於いて日



## 2.【総会報告】

2000年度総会は、11月8日（水）16時30分より明浜町中央公民館で開催された。安孫子麟会長の挨拶ののち、議長に大野晃、酒井恵真の両会員を選出した。

### 1、2000年度の事業報告

米沢事務局長より下記の件につき報告があった。

#### (1) 理事会

第1回	1999. 10. 17	東洋大学
第2回	1999. 12. 11	明治大学駿河台校舎
第3回	2000. 4. 22	明治大学駿河台校舎
第4回	2000. 9. 11	東洋大学
第5回	2000. 11. 7	愛媛県明浜町

#### (2) 『研究通信』

197号	2000. 1. 20	発行
198号	2000. 5. 22	発行
199号	2000. 10. 1	発行

#### (3) 会員動向

10月31日	現在
会員数	383名
新入会員	15名
退会会員	26名（学会費長期未納による退会者も含む）
逝去	3名

## 2、各委員会報告

### (1) 国際交流委員会

池上会員（北原委員長の代理）より次のような報告があった。

(1) 国際農村社会学会（IRSA）第10回（2000年）ブラジル大会での次期開催国の決定経緯については、すでに、『研究通信』にも報告したが、次期2004年大会はノルウェーに決定し、日本は、2008年の大会をアジアで開く際の最有力候補として期待されることになった。この際の実行委員会は別途再検討する必要があり、とりあえず、2004年大会開催国の立候補をめざしたIRSA招致実行委員会は解散する。

(2) 同大会で行われた地域組織の会合では、アジア農村社会学会（ARSA）の会合もあり、北原会員が次期会長に選ばれた。前期バンコク大会に継ぐ第2回大会は2003年が予定されており、開催国として日本、インドネシアの名があがった。開

催については、同学会が I R S A 公認の地域組織でないことを考慮して、その参加者の実質にふさわしく、参加経験者ネットワークが実行主体となることがふさわしいと考えられる。もちろん、必要に応じて、村研とも相談することとする。

(注) なお、1999年 A R S A バンコク大会の報告集、Asian Rural Sociology Vol. 1 (1999) が、数十冊、韓国の柳前会長から北原新会長あてに送付されてきました。当大会の参加者には直接送られたはずですが、関心のある会員は北原に申し出てください。

#### (2) 年報編集委員会

渡辺委員長より、『村研年報・第36集』を発刊し、1階の受付にて販売中との報告があった。

#### (3) ジャーナル編集委員会

大内委員長より次のような報告があった。

『村研ジャーナル』の第12号(2000年3月20日)と第13号(2000年9月20日)を発行した。

#### (4) 学会賞選考委員会

吉沢委員長より次のような報告があった。

本年は、著書と論文の2部門で学会賞を選定する最初の年であり、会員からの推薦を期待し、推薦があれば選考委員に査読をお願いする体制を取っていた。しかし残念ながら会員の推薦がなく、本年は該当著書、論文なしという結果になった。来年度を期待しているので、会員皆様のご推薦をお願いしたい。

### 3、2000年度決算報告および監査報告

米沢事務局長より、2000年度の決算報告があった後、会計監査の小内会員より監査の結果適正な運用がなされている、との報告があった。(資料参照)

### 4、2001年度事業計画および予算案について

米沢事務局長より来年度の事業計画および予算案について説明があり、提案どおり了承された。

### 5、2001年度(第49回大会)大会開催地について

安孫子会長より愛知大学の渡辺会員を中心に東海地区での開催をお願いしたい

## 6、2002年度（第50回記念大会）について

安孫子会長より再来年の大会は、50回の記念大会であるので早めに準備に取りかかりたい。大会開催地としては、遠野での開催を考えているので、もし大会のお世話を岩本由輝会員にお願いできるならば非常に有り難い、との提案があった。これを受けて、岩本会員より引き受ける旨の挨拶があった。

## 7、2001年度の学会事務局について

昨年に引き続き、九州地区の米沢、徳野、古賀の3会員にお願いすることに決定した。

### 3.【理事会報告】

#### 2001年度 第1回理事会議事録

日時 平成12年11月9日（木）

会場 愛媛県明浜町中央公民館

出席者：安孫子麟、高橋明善、熊谷苑子、渡辺 正、吉沢四郎、青木辰司、市田知子、小内純子、黒崎八洲次良、佐藤直由、堤マサエ、中道仁美、東 敏雄、細谷 昂、米沢和彦（15名）

欠席者：北原 淳、大内雅利、河村能夫、古賀倫嗣、白樫 久、杉岡直人、鳥越皓之、藤井 勝、松村和則、矢野敬生（10名）

#### 1、委員会報告

##### (1) 研究委員会

熊谷委員長より、2001年度大会のテーマセッションについて、蘭会員のコーディネートにより進んでいる準備状況が報告された。2002年度大会（50周年）については、研究委員会で「21世紀村落研究の視点」という方向でテーマセッションを構想中であることが報告され、プログラムに自由報告のセッションを確保することが提案された。

#### 2、その他

2001年度の理事会の日程等について協議した。

## 第2回 理事会議事録

日時 平成12年12月9日(土)

場所 明治大学駿河台校舎 1098教室

出席者：安孫子麟、高橋明善、熊谷苑子、渡辺 正、吉沢四郎、青木辰司、市田知子、河村能夫、黒崎八洲次良、白樫 久、堤マサエ、中道仁美、東 敏雄、矢野敬生、米沢和彦(15名)

欠席者：北原 淳、大内雅利、小内純子、古賀倫嗣、佐藤直由、杉岡直人、鳥越皓之、藤井 勝、松村和則、細谷 昂(10名)

### 議題

1、各委員会の委員を昨年同様とすることを確認した(留学等の関係で若干の変更)。

#### (1) 研究委員会

委員長 熊谷(松田)苑子

委員 小内純子、佐藤直由、ガボリオ・マリ、本城昇、松村和則、秋津元輝、蘭信三、徳野貞雄

#### (2) 国際交流委員会

委員長 北原淳

委員 池上甲一、大友由起子、嘉田由起子、河村能夫、黒柳晴夫、鳥越皓之、中道仁美、満田久義

#### (3) 年報編集委員会

委員長 渡辺正

委員 大川健嗣、小内純子、北原淳、黒崎八洲次良、白樫久、野崎敏郎、東敏雄、細谷昂、矢野敬生、藤井勝

#### (4) ジャーナル編集委員会

委員長 大内雅利

委員 青木辰司、荒樋豊、池田寛二、磯辺俊彦、市田知子、大森正之、佐久間政弘、重岡 徹、杉原たまえ、高田滋、高橋明善、立川雅司、築山秀夫、堤マサエ、皆川勇一

#### (5) 学会賞選考委員会

委員長 吉沢四郎

## 2、各委員会報告

### (1) 研究委員会

熊谷委員長より、2001年度大会のテーマセッションのタイトルと報告者が決定したことが報告された（本通信の蘭会員による記事を参照されたい）。2002年度大会（50周年）のテーマセッション「21世紀村落研究の視点」については、21世紀における村落研究の課題を、農業生産システムと、村落の社会関係に関して論ずる場とすべく準備中であると報告された。

### (2) 年報編集委員会

渡辺委員長より『村研年報・第37集』の編集について次のような報告があった。

『村研年報・第37集』の編集については、第48大会時と2000年12月9日開催の編集委員会で、『第36集』編集の経過をふまえて企画と日程等の方針を確認した。第36集の批判的、発展的継承を明確にした内容にすること、次回大会までに発行することを基本にして、第48回大会のテーマセッション『日本農業・農村の史的展開と転機に立つ農政』—第2次大戦後を中心として—の発表者の論文を主体とした特集内容とすることにした。全体の構成についての調整をコーディネーターの大川健嗣会員（山形大学）にお願いしたい。

#### 《研究動向》に関する業績資料の送付のお願い

各分野の研究動向について、次の会員にご執筆いただくことになりました。関連する業績等についてそれぞれの執筆者宛に、3月末日までにお送り下さるようお願い致します。

#### ○史学・経済史学分野

山内 太 （長野経済短期大学）

〒

#### ○農業経済学分野

千葉 修 （農業総合研究所）

〒

#### ○社会学・農村社会学分野

堤 マサエ （山梨県立短期大学）

〒

Tel.



○人類学・民俗学分野  
八木 透 (佛教大学)  
〒  
Tel.

(『村研年報』編集委員会 渡辺 正)

(3) ジャーナル編集委員会

14号(2001年3月刊予定)を編集中との報告があった。

3、第49回(2001年度)大会について

渡辺正会員より、大会の概要について報告があり、平成13年11月10日(土)、11日(日)に静岡県三ヶ日町で開催することを確認した。

4、昨年度の第48回大会について

大会事務局長の中道会員より詳細な報告があった(中道会員の「報告」参照)

5、来年度の学会事務局について

関西地区にお願いすることにし、今後、具体的に折衝を進めることになった。

4. 【2001年(第49回)大会について】

先の第48回大会(於・愛媛県明浜町)の総会でご承認いただきましたように、第49回村研大会の開催事務局は愛知大学所属の教員を中心に担当させていただきます。充実した大会が開催できますよう準備と運営の努力いたしますので、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

大会内容の詳細については、具体的なプログラム等がまとまり次第お知らせいたしますが、先の理事会で確認されました日程等についてあらかじめご報告いたします。

○大会日程 2001年 11月10日(土)～11日(日)

○大会会場・宿泊所（予定）

浜名湖三ヶ日簡易保険保養センター（静岡県引佐郡三ヶ日町都筑）

○大会実行委員会組織

・大会事務局 愛知大学文学部社会学科研究室

〒441-8522 豊橋市町畑町1-1 Tel. 0532-47-4111

E-mail nabe@vega.aichi-u.ac.jp

・実行委員長 交野正芳 / 事務局長 渡辺 正

・事務局 渡辺和敏 岩崎正弥 黒柳晴夫

（第49回村研大会事務局・渡辺 正）

## 5. 【村研第50回記念大会について】

### 第50回大会を引き受けて

東北学院大学 岩本 由輝

遠野といえば、皆さんそれぞれの思い出があるのであろう。日本村落研究学会が村落社会研究会、いわゆる村研として創立されて以来、50回目の節目の2002年大会を遠野で開催したいとの申し入れが事務局からあった。遠野での開催ということになると、学外に出るわけであるから私の大学からの補助は期待できない。そのかわり、私の一存で引き受けることができるので、開催に必要な段取りをつけるだけということ引き受けることにした。

そのさい、遠野で一番心配されるのは宿泊ということである。ホテルと名のつくものはあるが、収容力がない。民宿に分宿ということになるのも煩わしい。そこで私がいささか関係している遠野博物館に聞いてみたら、目下、宿泊100名ほどの研修センターを建設中とのことであった。竣工は2001年7月ということなので、2002年大会には十分間に合うことがわかった。研修センターということであるから、会場とセットできるので好都合である。

そこで開催期日であるが、遠野の気候から考えて10月中旬がよかろうということで、2002年10月中旬の土日をあてることにし、まだ未完成のセンターに予約を入れておいた。2002年のカレンダーが明らかになった時点で、期日を確定したいと考えている。

ところで、遠野が人々に魅力を抱かせるのは、『遠野物語』の存在である。1908年の晩秋に柳田國男が水野葉舟の案内で自邸を訪れた遠野出身の佐々木喜善から、その後、何回かの聞き取りでまとめたものが『遠野物語』である。1909年の旧盆の頃には、上梓を前に柳田は遠野を訪れている。そこに出てくる119にのぼる話は確かに多いが、かつてこの農

山漁村では古老といわれるような人は、こうした類の話の20や30ぐらいは知っていたものである。私も1944年に東京から相馬の田舎に疎開してきたとき、近所の年寄りからこうした類の話のずいぶん聞かされたものである。そうした素地があつて『遠野物語』を読んだのと、大学に入って教養課程で『遠野物語』を紹介されて読んだのとはずいぶん違うものがあるだろうと私は考えている。そして、私は遠野では『遠野物語』が意外と読まれていないことも知っている。「『遠野物語』なんて、どこの話」という反応を示すのは、私にはきわめて健全に思える。私に、「岩本さんもいい年して、遠野物語でもあるまいに」と逆を喰わせてくる人もいることも事実である。たしかに、遠野の町を歩けば、観光としての『遠野物語』にまつわるものに満ちあふれている。酒から饅頭まで、それこそ辛党から甘党にまで『遠野物語』の名声を活用している商品に事欠かない。しかし、遠野の人は、それはそれとして『遠野物語』については醒めている。「遠野物語、それで喰えるのか」という反発を示す人もいる。

私は遠野が『遠野物語』を題材に、それなりに観光で成功しているのは、“キワもの”を売りものにしてからだと聞いたことがある。それは遠野観光の目玉がカップであり、ザシキワラシであるからである。しかし、カップに行つてカップに会えなくても怒る人はいないし、泊まった民宿の部屋にザシキワラシが出なくても看板にいつわりありと目にカドを立てる人もいない。遠野観光は要するにこういうところに成り立っているのである。なまじ実体的なものを売り物にしたら、いまの数あるテーマパークのように失敗するのがオチであろう。

とにかく、こういう現代の『遠野物語』の世界を自分の眼で確かめてほしい。エクスカッションも別に準備はしないので、自分の足で心ゆくまで柳田國男が石狩の平野よりも広いといった遠野を歩いてほしい。『遠野物語』は自動車のなかった時代に成立したものである。とにかく自分の足で歩くのが『遠野物語』の世界に入る最もよい方法であると、私は信じている。皆さんが現代の遠野を歩きまわることによって『遠野物語』幻想から解放されるならば、遠野で大会を開く意味があるというものである。

遠野の地元にも、私は研修センターを大会と宿泊のため提供して貰う以上のことは求めない。それは当事者がそれに要する費用を負担すればすむことであり、そうすることが地元に対する礼儀であろうと、私は考えているからである。

## 6.【第48回大会(愛媛県明浜町)の事務報告】

大会事務局長 中道仁美

第48回大会を2000年11月7日より10日の4日間にわたり、愛媛県明浜町で開催しました。第47回大会が都内、東洋大学で開催されたので、2年ぶりの地方開催でした。平日

の開催となり、全日程の出席が難しくなったとはいえ、大会参加者は正会員 71 名、学生会員 9 名、非会員 1 名、地元出席者 12 名、の合計 93 名で、盛況でした。改めて、お礼申し上げます。

今回の大会は、愛媛大学農学部の中川聰七郎会員を代表に、法文学部の中村則弘会員、高橋基泰会員と農学部の中道が協力して、2 年近い時間をかけて地元の選択、協力依頼等、検討して行ったものでした。地元の明浜町では、産業課の横山博文さん、企画調整課の宇都宮松夫さんが中心となって、役場の全面的協力体制を作り上げてくださいました。影の協力者は、一昨年の中道研究室の研究生で、この前まで明浜町の担当であった、現御荘地域農業改良普及センターの西川昌美さんでした。

大会を終えて、事務局と役場の担当者合同で事後の検討会を開催しました。今大会では、いくつか、新しく試みたことがあります。参加費・宿泊費の事前振込については、会計業務の軽減はもちろん、とりわけキャンセルによる事務局負担がなくなりました。今回、直前、その場のキャンセル等は総額で 123,200 円になりました。ぎりぎりの予算で運営していますし、振込期限を開催約 3 週間前までにしていましたので、理事会にご相談のうえ、一切、返却しないことにしました。

大会の案内に電子メールを優先し、手紙と併用したことで、事務局の負担が大きく減りました。また、ホームページを開設しましたので、問い合わせ等にも活用できました。今回は利用者がありませんでしたが、若い研究者支援の意味を込めて、保育支援について配慮しました。

地元で開催する良さをなるべく出したいと、食事、飲み物等にも地元産を利用するように配慮しましたが、そのことで、役場の方々にはお世話になりました。ただ、宿泊施設の違いにより、ご不満のあったこと、申し訳なく思っています。特に、一部施設が狭く、不便でありましたこと、お詫び申し上げます。手伝いの学生も、事前研修不足のため、十分な説明等ができなかったことを反省しておりました。役場職員の皆さんからは、いろいろ研修する機会であったと良い評価をいただきました。

今後の課題は多々、出されましたが、特に、報告者のコピーについて、増し刷りは大変なので、報告者の責任で必要部数を確保することを徹底して欲しいとのことでした。

最後になりましたが、今大会の収入は、大会参加費、宿泊費、食費等が 2,227,700 円、その他に、愛媛大学から学長裁量費 620,260 円、明浜町商工会から 10,000 円、東宇和農業協同組合から 20,000 円、総額 2,877,960 円でした。支出は、懇親会の飲み物を役場から寄贈いただいたこと、マイクロバス代等についても役場に負担いただきましたので、2,319,113 円で済みました。当初、大学他から一切の支援がないものとして予算計上しましたので、結局、558,847 円が残りしました。なお、詳細については理事会に報告しました。振込手数料を除き、全額を学会会計に振り込ませていただきます。

## 7.【大会印象記】

森尾晴香（筑波大学大学院農学研究科、旧姓：佐藤）

20世紀最後の村研大会に、私は会員として、また報告者として、初めて村研大会に参加させていただきました。振り返ってみて、大会中は多くの先生や研究者の方々からアドバイスを頂き、よき出会いもあり、実り多い充実した3日間であったと実感いたしております。

出発前は初めての発表ということで、とても緊張しておりました。しかも周囲の村研にまつわる体験談というものは、容赦ない議論が時間無制限でおこなわれた、引き続いて夜も合宿所で質問責めにあった、朝まで酒を飲んでたいへんな思いをしたなどというもので、ほとんど脅かされていたという感じでした。つくばでレジュメをつくっていても、きっとここが指摘されるだろうな、ここが足りないな…などと次から次へと不安がよぎりました。

しかし四国という初めての土地が幸いしたのか、飛行機とバスを乗り継いで松山駅に到着したとたん、名物の“讃岐うどん”や“じゃこ天”などに目が奪われてしまい、昼ご飯の後にもさらに食事をし、すっかり気分がよくなってしまいました。しかも、よせばいいのにせっかくだから愛媛の景色を見ておこうなどと思いつき、鈍行列車に乗って約3時間半、しかも卯之町に到着するころには真っ暗で景色もまったく見えずという小旅行をしてしまいました。出迎えのマイクロバスに間に合ったからよかったものの、卯之町から明浜町まではさらにバスで山道を30分以上走ることになり、遠くに浮かぶイカ釣り漁船の灯りを見ながら、無茶なことをしてしまったと反省しました。

翌日の個別発表での順番は4番目。自分の番がくるまでは、つつい発表原稿に目がいてしまいました。マイクをもったときにやっと落ち着いたものの、早口になってしまったり、時間不足のために抜いてしまった箇所もありました。しかし、発表後は東敏雄先生や高橋明善先生はじめ、多くの先生方から鋭いご指摘やあたたかいアドバイスをいただき、そのたびに深くうなずかされました。発表後の昼食の時間でも、多分野の先生方からアドバイスやご質問をしていただき、箸をとる時間をもったいないほどでした。

その夜には、受けたご質問やご意見などをノートに思い出せるだけ書いてみました。今でもそのページを開くと、いかに私の視野が狭く、資料を読みとる力が欠けていたのか痛感いたします。世にむかって自分の主張を述べる緊張感や、多くの研究者から研究を見られる恐さを味わわせて頂きました。と同時に、卒論から取り組んできた群馬県北橋村の農村経済更生運動についての研究を、ささやかながらも世の中に発表したのだという喜びもこみ上げてきました。この村研大会は私にとって発表の場というだけではなく、研究という長い道へのスタートラインにやっと立てたような、そんな思い出深いものとなったことに感謝いたしております。

さらに、大会中にはよき出会いもありました。宿泊した部屋（トレーラーハウス！）で一緒になった方とは今でもメールで研究上の悩みなどやりとりさせて頂いております。ま

た、私が調査地でお世話になっている家のご親戚だと名乗りでて下さった研究者の方もいらっしやいました。群馬県の小さな村でつながったご縁に、遠い四国でお目にかかれるとは不思議な思いがいたしました。同じ茨城県内にお住まいの先生からは、大会後にご著書やアドバイスを頂き、大学の外にて、研究者同士の学問的な刺激を受けることの大切さを実感しております。

また食べ物のことばかり書き上げて申し訳ありませんが、3日目のエクスカージョンで訪問した、内子町の農産物直売所“からり”では麦味噌を大量に買い、今も美味しくいただいています。あのおばあちゃんたちは今日もバーコードシステムを操り、ハツラツと働いていることでしょう。明浜町から発送した無添加のみかんジュースは外国産オレンジや濃縮還元ジュースとはちがって、すっきり、さわやか、周囲にも大好評でした。みかんは宿泊所でもふんだんに配られ、さすが“みかん王国”という感がいたしました。2日目の現地セッションではみかんの経営方針をめぐる農協や個人農園、双方のストレートな意見を目のあたりにし、産地形成における意志決定の難しさを実感いたしました。

懇親会での食事は海の幸尽くし。鯛やサザエのバーベキューや、鯛めし・鯛しゃぶ・鯛の焼きものなど、関東の人間からしてみれば贅沢この上ないといった料理ばかりで、三年分の鯛を食べ尽くしたような感じです。こうして“土地の恵み”を美味しくいただけるのも、それを担う人たちが安心して働き、暮らしを営み、海や土壤などの自然環境を守っているおかげです。21世紀も村研大会は全国各地で開かれるようですから、ぜひこのような楽しみが続くよう目を向けていかなければと思います。長くなりましたが、最後にこの思い出深い大会を支えてくださった皆様方にお礼を申し上げます。今後はこの大会で得たものを大事に育み、前進していけるよう努力していきたいと思います。

## 8. 【2001 年度学会大会・テーマセッションについて】

京都大学 蘭 信三

2001年村研大会のテーマ・セッションを担当することになりました蘭です。次回のテーマセッションについて簡単に紹介いたします。まず、タイトルですが、「いまあらためて日本農村の構造転換を問うー1980年代以降を中心として」にいたしました。このテーマは、村研のこれまでの長い歴史のなかで何回も取りあげられてきた、いわば「村研のメイン・テーマ」に属するものと言えましょう。したがって、「いまさら何を議論するのか」という批判もあるでしょうが、若手を中心として村研50年の蓄積に挑戦していきます。

では、なぜこの主題を選んだのかについてその趣旨を簡単に説明します。20世紀の日本の農村を振り返ると、1920年代から30年代にかけてその近代農村システムの原型が形成され、農地改革を経てそれが戦後の農村構造にいったんは再編されます。しかし、それも

高度成長下に崩壊しだし、1970年代の農政の転換も相まって、1980年代にその構造転換が決定的になりました。20世紀日本農村の基本構造が崩壊あるいは新たな構造へ向けてその再編が顕著になっていくのが1980年代以降の農村の姿と言えましょう。すなわち、具体的には、高度成長下にはじまった労働力の都市への移動、産業としての農業の衰退、それを担ってきた近代システムとしてのイエやムラの崩壊あるいは再編があげられましょう。さらには、近郊農村の都市化、全般的な兼業化と農業の女性化、山村の過疎化、そして急激な高齢化、すなわち農村・農業の解体化や空洞化とも言える諸現象です。その一方で、新たな農業経営の展開、集落機能の再編、農村女性の活躍、そして都市からの新規移住者や外国人花嫁そして外国人農業研修者といった「多様化」や「国際化」が、日本農村に新たな展開をもたらしているというのが現状ではないでしょうか。

もっとも、農村は、戦後の国家システム（具体的には農政や産業資本や都市）によって規定され、そして次第に世界システムによる影響を強く受けるようになってきました。しかし、当然ながら、農村は、これらの外部の大きな力によってだけでなく、それらに対抗する内部の主体的な対応によって、さらには両者の相互作用によって規定されてきました。産業化や都市化や国際化という大きな奔流のなかで、農村はイエやムラという従来のシステムを捨て去ったり再編したりしてその状況に主体的に対応してきたのです。

では、このような状況において、日本農村の構造転換は、どのような局面において、どのようなプロセスをたどり、そしてどのような原理でもって展開してきたのでしょうか。また、この構造転換によって、日本農村の本質はどのように変化してきたのでしょうか。あるいは、日本農村のどの部分は変化しないで存続しているのか、それは、何故なのか。そして、これまで日本農村が経てきた構造変化と80年代以降の構造転換は質や程度においてどのように異なっているのか。これらの諸点を考察していきたいのです。

最後に、このような問題意識と認識でもって、以下のように部会を構成していきます。まず、蘭が都市化、過疎化、兼業化、女性化、高齢化そして国際化といった諸局面から農村の構造転換を概観します。つぎに、庄内農村をフィールドとする永野由紀子さんがこれまでの学説を踏まえながらもイエの変化と再編を独自の視点から問題提示し、滋賀湖北をフィールドとする藤村美穂さんが幾重にも折り重ねられているムラの諸機能を環境という視点からその根源的な側面を問いただします。また、過疎の進行はイエやムラをどのように直撃しそれを解体あるいは変容させていくのかを、過疎の深化した中国山地や九州山地をフィールドとして高齢者福祉を考察してきた高野和良さんが掘り下げます。そして、最後に、日本農村を史的に分析してきた農業経済学者の玉真之介さんに、80年代に行政が展開してきた農村活性化政策から日本農村の構造転換がどのように相互作用してきたのかを論じてもらいます。

このように、本テーマセッションは、若手研究者を中心として、村研の中心テーマであったイエとムラに徹底的にこだわり、80年代以降の農村の構造転換に迫り、そこから新た

な農村の姿を浮かびあがらせていけるセッションにしたいと考えています。課題は、村研の会員に共通なテーマです。報告者の一方的な報告ではなく、フロアーとの議論を通じて問題点を絞り込んでいきたい所存です。力不足ですが、この1年間精進します。

・セッション・タイトル

いまあらためて日本農村の構造転換を問うー1980年代以降を中心として

・セッションの構成

1. テーマの解題

日本農村の構造転換の概観とその原理ー1980年代以降を中心にして

蘭 信三 (京都大学)

2. イエの変化と再編

永野由紀子 (山形大学)

3. ムラの再評価ー環境という視点から

藤村美穂 (佐賀大学)

4. 過疎化とイエ・ムラの崩壊、あるいは再編

高野和良 (山口県立大学)

5. 日本農村の構造転換と農村活性化政策

玉真之介 (岩手大学)

## 9. 【地区研究会報告】

(1) 東北地区研究会 (2000年度)

日時：2000年9月30日(土) 13時30分～16時30分

場所：仙台市青年文化センター

出席者：細谷昴、小林一穂、佐久間政広、武田恭治、山下亜紀子、島貫秀樹(非会員)、  
佐藤直由

報告：山下亜紀子「福祉サポート源に関する農村高齢者の評価意識についての考察  
ー青森県黒石市の調査をもとにー」

山下会員の報告は、青森県黒石市の純農村地区(農家世帯率65%)でおこなった福祉サポート源に対する高齢者の評価意識の調査結果にもとづいてなされた。調査の課題は、地域における各福祉サポート源についての評価を検討することと、この評価に家族的状況が影響力をもっているかどうかを検討することにおかれている。山下会員は、福祉サポート源の提供主体の現代的形態を、藤村正之(1999)に依拠して、「自助」(愛情に基づく)、「互酬」



(血縁、地縁、社縁、選択縁に基づく)、「再配分」(法と観念に基づく)、「市場交換」(企業がおこなう)という四つの領域に区分してとらえ、さらに先行研究を整理するなかから、介護者の側では心理的抵抗感や社会的、地域的、家族的な背景によって、自助的な福祉サポートをおこなっているということと、介護の当事者となる高齢者世代では再分配領域に属する福祉サービスに対する期待が子世代よりも高い、という二つの結果を抽出し、調査地である農村部においての検証も企てている。

結果の分析では、自助の領域への期待の高さがあるものの、公的サービス(再分配領域)や住民参加型サービス(互酬領域)への評価の高さもみられることから高齢者の意識における福祉サービスへの期待の高さを指摘するとともに、家族形態が高齢者の福祉サポート源とりわけインフォーマルな福祉サポート源に対して規定力を持つてはいるものの、家族の小規模化が公的サービスや住民参加型サービスへの期待の高さに作用しているわけではないことも指摘している。さらに、聞き取り調査からは、自助のサポート源に期待しつつも家族の就労状況によって福祉サービスの選択なかでも在宅サービスの選択がなされていることから、福祉サービスへの心理的抵抗というよりも家族への遠慮がそうした選択をさせていると指摘している。

山下会員はこうした結果から、農村部においても自助領域に大きな期待がみられるものの福祉サービスへの期待があり、その必要性が増大する可能性があること、また、高齢者のサイドからの福祉サービスの選択という意識は、介護者のサイドからの福祉サービスへの抵抗感という意識とは異なるものであり、そこに介護する側と介護される側との意識のギャップがあること、を導き出し、さらに、農村の高齢者は家族の変化と自助サポート入手の困難さを認識していることを明らかにしている。

報告後、調査対象者の属性やデータ上のバイアスをめぐる議論や、サポート源に対する農村高齢者の意識の問題、親世代と子世代の介護をめぐる意識のギャップがなぜ生じるのかといった点について活発な質疑、議論がおこなわれた。

(文責：佐藤直由)

## (2) 関東地区研究会 (9月23日)

参加者 (順不同) :

牧野修也 (東洋大・院)、斎藤京子 (農水省)、松村和則 (筑波大)、ガボリオ・マリ (慶大)、熊谷治男 (東農大)、熊谷苑子 (淑徳大)、大内雅利 (明大)、宮崎俊行 (朝日大)、高山隆三 (明海大)、松岡昌則 (秋田大)

発表者：大内雅利「農村高齢化とイェムラ理論」

大内会員は、男子農業就労者の構成比から1960年代から一貫して「昭和ひとけた」前半世代が日本農業を支えてきたこと(1995年、21.3%)を「責任を引き受けざるを得なく

なった世代」という。このライフコース上の特徴が今日の「農村高齢者問題」の背景にあり、「イエ・ムラの解体」のみが農村高齢者問題を顕在化するものではないと述べて議論を始めた。イエ・ムラ論は生産と生活が一体となっている現実が前提であり、その段階では理論の中に高齢者の「居場所」は見えなかったし、問題として顕在化することはなかった。すなわち、有賀、鈴木、竹内のイエ・ムラ論に今日の「介護期間の長期化という新しい高齢者問題」への視点を見いだすことはできないし、新たな福祉政策（例：介護保健）へは新たな「有償労働組織」論が構築されなくてはならない旨を述べた。

さらに、基本的人権、社会的弱者の保護という普遍思想としての福祉概念は、イエ・ムラ理論とはなじまない。しかし、現実としてイエの系譜性、ムラの農地、定住性というイエ・ムラのミニマム条件は今日でも確認できるが多様な生活主体によって担われる政策が望まれていると結んだ。

【参考文献：大内雅利「農民のライフコースと戦後農村社会史」『明治大学農学部研究報告』第122号 2000】

発表者：松岡昌則「高齢者と福祉-高齢者の生きがいと地域社会関係-」

松岡会員の発表は、基本的に秋田を中心とした東北農村のフィールドワークに基づいてのものであった。高齢者の現実を凝視する立場から「健常から寝たきりまで、生きがい・人間らしさを追求する幅の広い概念」として「福祉」を考えるとという前提に立ち、労働・家族・地域社会の中における望ましい高齢者の生活を展望する。

家族介護、社会的介護（介護保健サービス）の両方に限界があり、地域福祉が補完しなければならないと考える。

1) 介護保険対象サービスも2) 介護保険対象外サービスも楽しく生きがいを持つてのサービスに不十分である。これらのサービスに加えて、「必要な援助」として声かけ、見守り、話し相手、雪寄せ・雪下ろし、買い物、通勤介助（移送以外）、ゴミ出し、入院看護、住居の補修などが日常生活を送る上で必要であり、これらが地域の中で配置されることが重要だと主張された。

伝統的介護意識（親の介護は家族でという）があり、この「責任放棄」への規範を超えて、個別対応の限界に対処するにはムラが組織として機能しなくてはならないという。その背後には、町場への「呼び寄せ同居」に応じた高齢者も「する事がない」「話す人がいない」という現実に直面してムラへ戻っていくという事例があまりにも多く、住み続けることのできるムラを再構成しなければならないと述べた。

【参考文献：松岡昌則「高齢者の生きがいと地域社会関係」『社会学年報』No. 29 2000】

二会員の報告は、ある意味で好対照であった。従来の互惠の論理に則ったイエ・ムラの協同関係は今日の福祉を考える上で限界があると大内会員は考えている。松岡報告は、言うなれば「自前の福祉」を考えていく必要を述べているのに対して、大内会員は制度の福

祉を整備していく必要を述べることから報告が出発していた。また、大内会員はイエ・ムラ理論は変動を扱うにはそぐわないと考えられているのに対して、生活保障の「基体」としてイエ・ムラを考え、その上に福祉追求の機能を預けようというのが松岡会員の主張であろう。いうなれば、イエとムラの理論を分離し、イエの機能的限界をムラ/ムラ連合が補完する方向へ誘導しようという意図あるように思われ、あくまで自前の「福祉」の必要を主張する報告であったと思う。

イエ・ムラの現実態を巡っての議論も百出して熱気のある研究会となった。宮崎会員は、「自立できなくなったら人間は終わり。公的介護は農村にも必要なのだろうが、公の制度にのみ頼るのではなく自分の力で老後を生きていくのが基本」と議論を締め括った。

(文責：松村和則)

## 10.【京都環境社会学国際会議の開催のお知らせ】

(満田 久義)

国際社会学会(「環境と社会」研究委員会：RC24)と日本社会学会と日本環境社会学会と佛教大学の共催による京都環境社会学国際会議(Kyoto Environmental Sociology Conference)が、2001年10月20日から23日まで佛教大学常照ホールで開催することになりました。とくに、10月21日(日)には、一般公開国際シンポジウム「21世紀における環境と社会-環境社会学の新しい動向」が開催されます。

今回の環境社会学国際会議は、1992年にオランダで開催された最初の会議以後、アジアで開催される最初のもので、また、環境の21世紀の初頭を記する特別な意味をもつ国際環境会議でもあります。詳細については、下記のホームページを参照ください。皆様の参加をお待ちします。

一般公開国際シンポジウム

『21世紀における環境と社会』

-- 環境社会学の新しい動向 --

Environment and Society in the 21st Century :

New Direction for Environmental Sociology

2001年10月21日(日) 9:00- 19:00

午前の部 会長セッション：環境社会学の源流をさぐる

午後の部 全体セッション：21世紀における環境社会学の新しい動向

夜の部 歓迎パーティー

会場 佛教大学常照ホール

主催 佛教大学・国際社会学会「環境と社会」研究委員会

共催 日本社会学会・日本環境社会学会

後援 京都府・京都市

\*シンポジウム参加無料（同時通訳あり）

京都環境社会学国際会議実行委員長

満田久義

連絡先 603- 8301 京都市北区紫野北花ノ坊町9 6

佛教大学社会学部満田研究室

kesc@bukkyo-u. ac. jp

[http://www. bukkyo-u. ac. jp/kesc](http://www.bukkyo-u. ac. jp/kesc)

#### 11. 【学会費納入のお願い】

振替用紙を同封いたしますので、ご確認の上、2001年度までの学会費の納入をよろしく  
願います。（納入済みの方には同封しておりません）

なお、学会費は正会員 8,000 円 院生会員 5,000 円です。

#### 12. 【会員名簿作成のお願い】

本年度会員名簿を作成いたしますので、同封の葉書を2月末日までにご返送ください。

#### 13. 【会員動向】

##### 1、住所変更

(1) 森尾（佐藤）晴香

(2) 藤井 和佐

所属：奈良女子大学文学部

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 Tel. Fax. 0742-20-3269 (直通)

(3) 南 裕子

(4) 中島 信博

(5) 佐藤 利明

## 2、住所不明

(1) 今井 信雄

(2) 白井 康裕

(3) 小林 浩樹

## 3、退会

(1) 長谷川 昭一

(2) 斎藤 吉雄

(3) 嶋田 幸恵

14. 【資料】 【2000 年度予算及び 2000 年度決算】

一般会計

収入の部

(単位：円)

科目	00 年度予算	00 年度決算	備考
前年度よりの繰り越し	1,113,272	1,113,272	
会費収入	3,104,000	2,521,200	
村研ジャーナル販売代金	504,000	25,300	
利息	800	1,287	
雑収入	50,000	0	
合計	4,772,072	3,661,059	

支出の部

(単位：円)

科目	00 年度予算	00 年度決算	備考
村研ジャーナル印刷費	1,400,000	1,365,253	(No. 12, 13)
同上追加購入代	86,400	1,360	
研究通信等印刷費	180,000	253,800	
連絡通信費①	217,620	201,220	
連絡通信費②	60,000	24,070	
交通費補助	600,000	350,000	
編集委員会費	50,000	18,660	
研究委員会費	20,000	6,420	
地区研究会費	50,000	40,000	
国際交流委員会費	20,000	0	
学会奨励委員会費	20,000	0	
学会奨励賞費	70,000	0	
事務局消耗品費	50,000	24,529	
事務局謝金	100,000	75,000	
事務局交通費補助	100,000	85,000	
雑支出	10,000	36,389	
会員名簿印刷費	100,000	0	
(小計)	3,134,020	2,481,701	
予備費	931,200	0	
次年度繰越金	706,852	1,179,358	
合計	4,772,072	3,661,059	

特別会計 (国際交流費)

収入の部

支出の部

前年度繰越金	107,388	通信費	0
		会議費	10,000
		事務費	0
		次年度繰越金	97,388
合計	107,388	合計	107,388

## 【2001 年度予算案】

### 一般会計 収入の部

科目	00 年度予算	01 年度予算案	備考
前年度よりの繰り越し	1,113,272	1,179,358	
会費収入	3,104,000	2,944,000	8000×343 人+5,000×40 人
村研ジャーナル販売代金	504,000	500,000	
利息	800	1,000	
雑収入	50,000	50,000	村研ジャーナル広告料
合計	4,772,072	4,674,358	

### 支出の部

科目	00 年度予算	01 年度予算案	備考
村研ジャーナル印刷費	1,400,000	1,400,000	2 回発刊
同上追加購入代	86,400	50,000	
研究通信等印刷費	180,000	250,000	3 回発行
連絡通信費①	217,620	250,000	
連絡通信費②	60,000	50,000	
交通費補助	600,000	600,000	
編集委員会費	50,000	50,000	
研究委員会費	20,000	20,000	
地区研究会費	50,000	50,000	10,000×5
国際交流委員会費	20,000	20,000	
学会奨励委員会費	20,000	20,000	
学会奨励賞費	70,000	70,000	35,000×2 人
事務局消耗品費	50,000	50,000	
事務局謝金	100,000	100,000	
事務局交通費補助	100,000	100,000	
雑支出	10,000	10,000	
会員名簿印刷費 (小計)	100,000 3,134,020	200,000 3,290,000	返信用ハガキ代を含む
予備費	931,200	883,200	30%の会費未収見込み
次年度繰越金	706,852	501,158	
合計	4,772,072	4,674,358	

### 特別会計 (国際交流費)

収入の部	支出の部	
前年度繰越金	97,388	通信費
		3,000
		会議費
		20,000
		消耗品費
		10,000
		次年度繰越金
		64,388
合計	97,388	合計
		97,388